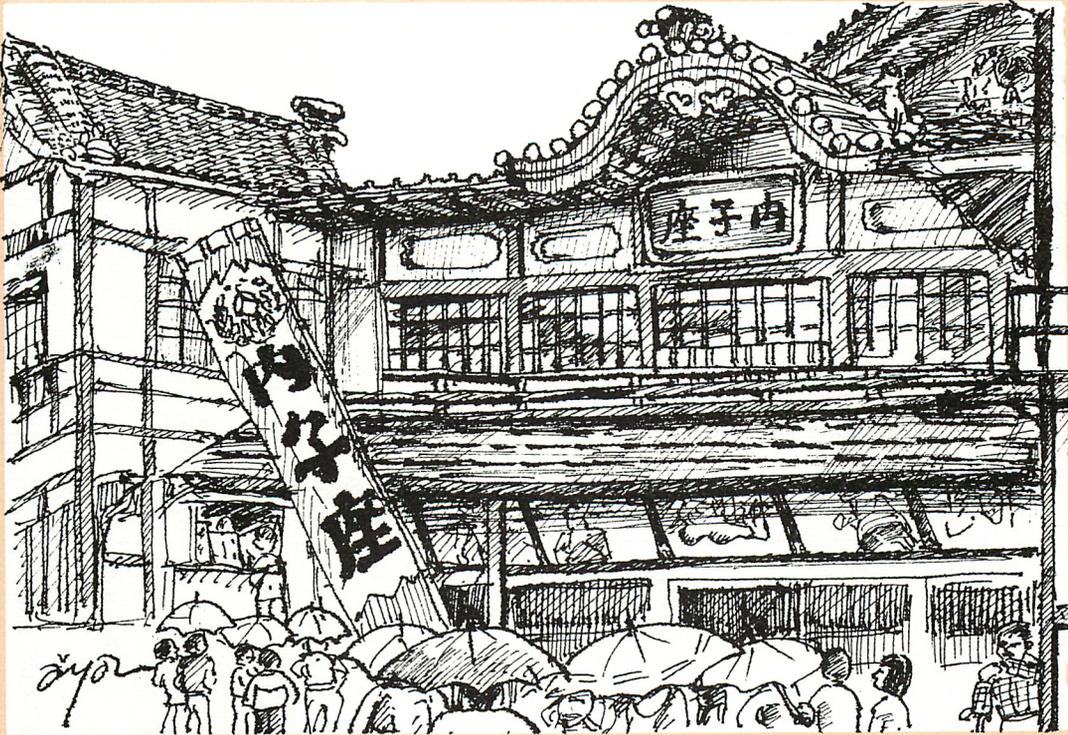


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 47



内子町（内子座）

特 長寿社会 —真の豊かさを求めて— 集

交流広場

- 家族で気軽にアウトドアライフを
- 施設づくりと町の役割
- 都市と農村を結ぶクラフトの里
- 青空市で生きがいづくり
- DE・あ・い・21って何するところ？

アングル

広域連携によるまちづくり……愛媛県市長会会長 今治市長/岡島 一夫……………1

特 『長寿社会 真の豊かさを求めてー』 集

交流広場

家族で気軽にアウトドアライフを……………松山市野外活動センター/加藤 英二……………2
 施設づくりと町の役割……………吉海町産業観光課/村上 光弘……………4
 都市と農村を結ぶクラフトの里……………(有)クラフトの里/石河 泓……………6
 青空市で生きがいづくり……………日吉夢産地/大森 千秋……………8
 DE・あ・い・21って何するところ?……………DE・あ・い・21/織田 浩史……………10

論談—まちづくり—

住民ネットがまちを変える……………滋賀文化短期大学教授/織田 直文……………12

キラリ光る町

ブナ北限の里づくり秘話……………北海道黒松内町……………14

ふれあい広場

リレーでちょっとーク(宇和島市・東予市から)……………16

地域を生きる

西フローラです。よろしく……………野村町/松井 律子……………18

研究員レポート

ブラジルに魅せられて……………竹松 毅……………20

地域づくり交流研修レポート……………中村 博之……………22

ふるさと再発見・創造塾報告

ふるさとづくりの相互啓発とキーマンの育成
 ……………愛媛県ふるさと整備課/菊池 暁彦……………24

風おこしのちかい

三人の先達に学ぶ……………青木 光利……………26

Information

媛のくにフラッシュ(松山市・玉川町・長浜町・一本松町)……………28
 「えひめ地域づくり研究会議'95年度フォーラム」お知らせ

特集「長寿社会
 —真の豊かさを求めて—」

今号のテーマ
 交流広場

「豊かな人生を生きる」この事は、誰しもが望んでいることだろう。ただ単に長く生きるということではなく、生きていくことを実感しながら、人間らしく生活することが大切であり、人生八十年という長寿を生きる現在においてはなおさら深い意味を持つことになる。

そういった長寿社会においては、地域が高齢者のみでなく若者を含めた全ての世代のネットワークによって支えられる事が重要である。しかし、現代における人々の価値観の多様化、人間関係の複雑化等は、地域で生きる喜びや助け合う心など地域連帯の思想や機能の稀薄化を招いているのではないだろうか。

人生を豊かに生きるためには人と人のふれあいが不可欠で、世代を越えた交流の機会や安らぎや潤いを感じる事のできる場づくりが、ひいては長寿社会づくりの大きな活力源になると考えられる。

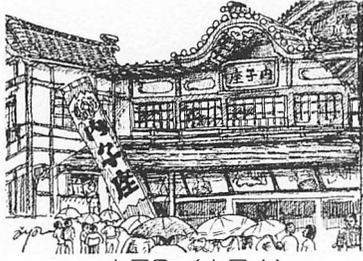
そこで、長寿社会—真の豊かさを求めて—のサブテーマを「交流広場」として、長寿社会における交流の拠点としての施設や活動に視点をあて、豊かな長寿社会のありかたを考えてみたいと思います。

(編集子 酒井)

表紙の言葉

肌寒く天気の良い日なのに、内子町の町並は観光する人が、そこに往來しています。生活と文化を一体化して保存に努力する町造り物ではないという町だからこそ、町づくりに、まだまだ高齢者の原動力を期待したいものです。人のぬくもりと、季節を感じる内子町であってほしい。内子座からの文化交流も楽しみの一つ。

柳原あや子



内子町(内子座)

広域連携による まちづくり

愛媛県市長会会長

今治市長
岡島 一夫



今治・尾道ルートは、その沿線

にさまざまな歴史資料や観光資源が存在するにもかかわらず、これが愛媛・広島の両県にまたがっているということもあり、これまで必ずしも一体的な情報発信がなされてこなかったきらいがあります。

このような中、愛媛県・広島県の関係市町村で構成する「西瀬戸自動車道周辺地域新興協議会」が結成され、沿線市町村が連携して架橋に取り組む機構ができたことは極めて大きい意義があります。

協議会では、沿線、周辺にわたる広域観光マップや観光ガイドブックを作成したり、架橋の途中下車システムを調査するなど着実に連携の成果を上げており、今後も

瀬戸内海横断自転車道を利用するためのレンタサイクルシステムの研究などを行っていく予定です。

一方では、今治市と周辺の陸地部町村の首長による「広域行政連絡会」の試みも開始し、地方分権時代における広域連携の方法や大規模施設の配置、ごみ問題や若手職員相互の交流等について研究を

行っています。

長引く経済不況により、地方自治体の財政事情は厳しさを増していますが、高齢化の進展に伴う社会福祉を始めとする行政ニーズは、ますます増嵩、多様化しています。このニーズに応え、行政の充実を図るために、地方分権や広域連合といった新たな制度を踏まえ、いつそうの広域連携を深めていくことが必要不可欠です。

かつて人々は、今治・尾道ルートを『夢の架け橋』と呼びました。その橋が今、まさに現実のものとなろうとしているのです。

しかし、人々が掛けた夢は、ハードの橋自体ではなく、橋がもたらす、さまざまな生活の向上や産業の活性化であったはずです。

真の夢を実現させるために、今治圏域さらには尾道圏域の市町村と連携・協力しながら「まちづくり」、「人づくり」に取り組んでいきたいと考えています。

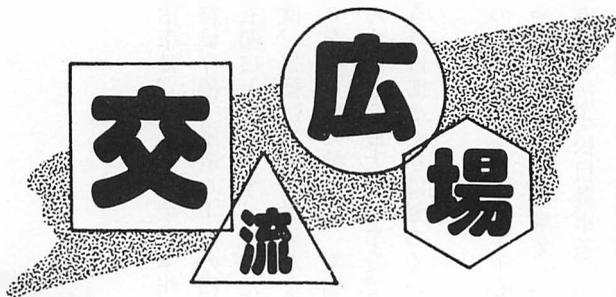
アングル

その内容は、基盤整備を中心に「今治新都市開発整備事業」「高規格道路今治小松自動車道」「国道一九六号バイパス整備事業」「野間馬ハイランド整備事業」「糸山公園整備事業」「桜井総合公園整

備事業」「道の駅建設事業」など主要プロジェクトの枚挙にいとまがありません。しかしながら、今後、こうしたハード面の整備もさることながら、同時に諸施設をいかに活用していくかといったソフト面の充実を目指すべきであろうと考えています。

また、施設を整備するにしても各市町村が思い思いに計画するのはなく、互いに連携し、架橋ルート上が一体的な受け皿となるよう整備しなければなりません。

— 真の豊かさを求めて —

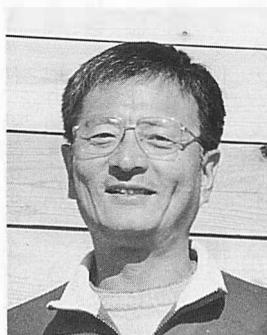


特 長 寿 社 会 集

家族で気軽にアウトドアライフを!!

松山市野外活動センター

加藤 英二



◆はじめに

松山市野外活動センターは、すべての市民が豊かな自然と触れあうことのできる野外活動の場を提供するとともに、特に青少年の健康増進及び健全な心身の育成を図ることを目的として設置されました。瀬戸内海が一望できる緑豊かな高原にあり、松山市の中心部か

ら車で三十分で行ける大変便利な位置にあります。平成三年四月に常設テント、フリーサイトテント、ロッジを中心として青少年キャンプ、ファミリーキャンプ、団体キャンプ等が行われるキャンプゾーンがオープン、平成四年七月に、学校や青少年団体等の集団宿泊訓練あるいは企業研修等のための施設、スクールゾーンがオープン、また平成六年八月、冒険キャンプができるパイオニアキャンプ場、水遊びができる親水広場、四季の変化を体で感じながら散策できるハイキングコース、自然の中で楽しく体力づくりができるアスレチック広場、車を乗り入れてキャ

ンプができるオートキャンプ場を持つアドベンチャーゾーンがオープンしました。さらにサッカーやラグビーのできる多目的グラウンド、テニスコート、ゲートボール場を持つ体育広場を現在整備中で、平成八年四月にオープン予定です。このように緑あふれる四十五畝という広大な敷地にそれぞれ特色のある施設が三つのゾーンに分け

られ、建ち並んでいます。この中で、長寿社会における交流の拠点としての当センターの果たす役割について考えてみたいと思います。

◆野外活動センターの事業

当センターの事業には、受入事業と主催事業があります。

◎受入事業

保育園から大学校まで各種団体宿泊訓練及び合宿の受け入れをします。小・中学校集団宿泊訓練は、小学校四年生、中学校一年生を対象にスクールゾーンがオープンし、平成六年度三十四校、平成七年度四十四校、平成八年度四十六校と着実に利用校の増加をみています。また各種団体及び企業研修等の受け入れ、遠足等の日帰り利用、一般市民のレクリエーション活動等に利用されています。平成六年度の利用者数は、六万五千人、今年度はすでに七万二千人が利用しており、特にバーベキューの利用客は、約三万人に上っています。なお、研修の場合、入・退所式、朝・

取るぞ!!タケノコ掘り大会



夕のつどいの強制はありません。当センターの施設、自然環境、特色等をよく理解され、団体の自主性を発揮して、効果的な活動を展開しているようです。

◎主催事業（平成七年度）

- ・タケノコ掘り大会
- ・当センター内にある竹林でだけのご掘りを実施。
- ・小学生交流キャンプ

小学四～六年生を対象に竹のほしづくり、バーベキュー、ナイトウォーク、手打ちうどんづくり、など実施

- ・こどもアウトドア教室（アドベンチャーキャンプ）
- ・ボーイスカウトを対象にした班キャンプ
- ・小学生ふれあい冒険キャンプ（小学生プールのフリーテントサイトを利用してのキャンプ生活（エンジョイサンデーイベント）
- ・毎日曜日ごとに、だれでも気軽に参加できるイベントとして実施。施設の自然を利用した四季おりおりの行事
- ・リーダー養成キャンプ
- ・キャンプリーダーの養成を目的に実施
- ・野外活動センターまつり

当センターの利用と発展を感謝し、一般市民や青少年団体、地元地区住民を招いて、野外活動の体験や各種イベント、模擬店、バザーを通じて野外活動の紹介や啓発を行う最大のイベントで、幼児から高齢者まで、五千人をこえる参加者で賑わいました。

野外活動の振興普及と指導者・協力者の養成をめざして、主催事業をもっと多くしようと現在、計

画をしているところです。

◆今後の展望

現在、主催事業としては、高齢者や三世代を対象とした具体的事業は実施していませんが市の広報バスを利用しての老人クラブによる当施設の見学をはじめ家族ぐるみでのロッジ等の宿泊・バーベキュー広場の利用を通して世代をこえた交流がなされています。

この度、啓発用ビデオ「レインボーハイランド（集団 宿泊訓練への誘い）」（二十分）を制作し、各公民館へ配付しました。このビデオを視聴していただき、ぜひとも研修の場として老人クラブをはじめ



うまくできた?炭づくり

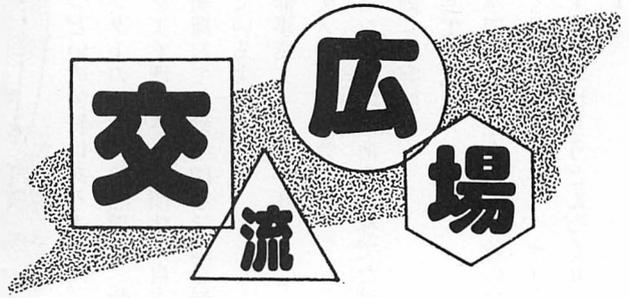
め各団体に利用してほしいと思います。また松山市老人クラブ連合会と連携を図り、高齢者キャンプや三世代ふれあいキャンプを企画するの必要かと思えます。

来年度からゲートボール場も新設されますので合宿されるのものががでしょうか。

◆おわりに

私がこの職場に勤務して八カ月が経ちました。アウトドアライフの経験がほとんどありませんが、小学生とともに過ごしたキャンプ、三世代そろってのロッジ利用客、バーベキュー・パーティーを見るにつけ、この施設が世代交流の拠点また安らぎや潤いを与える場になっていることを痛感します。エンジョイサンデーイベントも今後ますます定着させていきたいと思えますので、孫とともに参加され、昔とったきねづかを活かせば、きっと孫や子から尊敬される祖父・祖母になると確信しております。ぜひ当センターへお越し下さい。職員一同お待ちしております。

— 真の豊かさを求めて —



物を手に入れることによって満足感を味わってきた、いわゆる「経済の豊かさ」の時代から、今日人々の心は「物から心へ」と大きく変化している。

しかし、「心の豊かさ」とは一体どういうことで充足されるのだろうか。人によって心の豊かさへの満足感は様々である。そこで、今回、「心の豊かさ」を求める場所として、開設された、吉海町バ

施設づくりと町の役割

吉海町産業観光課

村上光弘

ラ公園の施設計画、活動内容、問題点、今後の展望などをご紹介します。

吉海町は瀬戸内海のほぼ中央、四国本土の北西部、今治市の海上四キロの大島の南西半分に位置し、面積は二十七・六九平方キロ、越智諸島の西玄関口となっている。七年九月末の人口は五千三百八十四人、社会問題となっている当町の高齢化率は、三一・四六％となっている。

産業は、農業・漁業・墓石採取加工が中心である。

吉海町は、瀬戸内海国立公園に囲まれた自然あふれる環境にある。しかし、ここで生まれ育った人々には、これが、あまりにも身近に存在するため、町民のイメージする公園という場所は、都市で存在



する、人の手によって整備された公園であったようだった。

そんな中でバラ園は、平成五年六月開園した八千二百平方メートルの施設である。計画前に町民にどんな施設が町にあったらいいのアンケート調査を実施した結果、花の公園という要望が多く、また、子どもを安心して遊ばせることができる施設と町には都市部に存在するような公園施設がなかったため、花の公園を整備することになった。

施設計画する上で、まず、テーマを「水と緑に包まれ、安らぎの空間づくり」に設定、花は、開花期の長いバラを植栽することになった。子どもたちのために、人気のある遊具も整備し、お年寄りから幼児まで、三世代が休日のひとときを過ごすことのできる施設、バラ公園が完成した。

現在、開園して二年半となるが、町民はもとより県内外からも多くの人々の御来園をいただいている。



急潮と美しい多島美

利用者は幼児連れの家族が多く幼児交流のひろばとなっているが、大人の交流のひろばでもある。

私も天気の良い休日には、三才の息子

をつれて、家族でゆとりを楽しんでいる一人であるが、微笑ましく感じれることがひとつある。それは、おじいちゃん、おばあちゃんが、孫をつれて遊ばせている光景がたびたびみ

かけられることである。この、老人たちは、この公園ができるまでは、おそらく、孫を安心して遊ばせていた場所は、海岸の砂浜か、運動場であったに違いないと思う。里帰りした孫が、「バラ公園につれて行って」とせがんでいる、父母は久しぶりに再開した祖父母に、「じいちゃん、ばあちゃん、連れて行ってやって」というやりとりが目にかんでくる。

バラ祭り・よしつみ95の様子



そして父母も、この公園なら安心して、祖父母に子どもを預けられるから、少しの間子どもから開放されるだろう、と考えてしまう。また、祖母も孫と安心して戯れることができる。き、バラ公園は、三世代共が心のゆとりがもてる「ひろば」となっているんだな、とかつてに想像している。

今、町行政は、このバラ公園をひろくアピールしようと、毎年五月初ころの日曜日に、バラの花の満開にあわせて「バラまつり・よしつみ」を開催している。町は、この公園ができてから、このイベントを開催してきている。以前は、

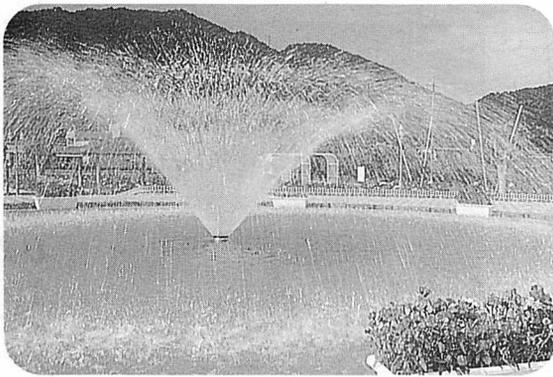
町外の人々が参集する町主催の定例イベントはなく、このバラまつりは子どもからお年寄りまで三世代が、この公園で楽しい一日が過ごせる内容にしているのが、特色だ。

こういった事からもこのバラ公園という広場は、着実に、町民に受け入れられ、バラ公園が出来てよかったと思われるに違いないと、町職員の立場でかつてに自己満足している。

行政における施設づくりは、必要不可欠なものであるが、施設完成後はこれの維持管理費が大きな負担となる事業でもある。

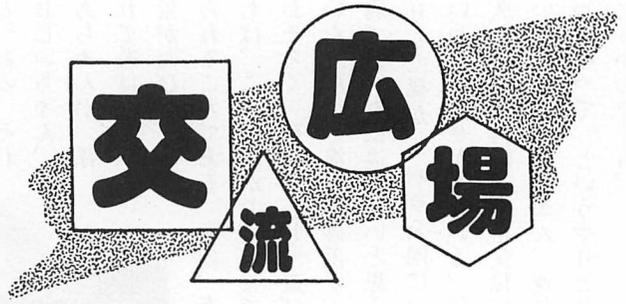
こういった公共施設は一概に、金だけで評価できるものではないが、バラ公園の維持管理費が、年間一千万円を超え、さらに町職員の労力負担も考えると、町にとつてかなりの負担になっているのが現実である。しかし、この施設が、町民にやすらぎや潤いをもたらした、また、帰省客が、「吉海はよくなつたなあ」と思っていただけなら安いのかもしれない。

かつて気ままなことがかり並べましたが、お近くへお越しのときは、ぜひ吉海町バラ公園という施設へお立ち寄り下さい。バラの見ごろは五月下旬から、十一月上旬ころまでです。



公園内 噴水広場

— 真の豊かさを求めて —



都市と農村を結ぶクラフトの里

(有)クラフトの里

石河 泓

クラフトの里は、木の香とぬくもりそして地域資源を活用して都市住民に農山村の文化を提供する事を目的として建設されました。国道56号を松山から大洲に向かって中山町の入り口に位置しております。クラフトの里はクラフトセンター、シャーベットハウス、そば道場、公衆トイレの四ヶ所からなっております。



○ クラフトセンター

木材資源の活用をはかるために町をあげ森林組合の製材木工所を開設。現在は、芸術家木遊社が在住し手工芸品の工房を持ち、クラフトセンターの商品を提供しております。その他地域住民の手作り商品の品が勢揃いしています。それに加えて中山町は「栗の里」に因んで栗の菓子類加工品等、中山ならではの商品が陳列されています。

また、センター広場を利用して土日に青空市「しあわせ市」が開

設されています。農家の手作り野菜と農産加工食品が客を呼び、まさに都市と農村の交流広場としてにぎわっております。買物が終るとちよつと一服を...と、喫茶「クラフトの里」があります。昼食時はカレーをメニューに加えています。

○ シャーベットハウス

手作りの味をモットーに産地の果物野菜をブレンドした商品はクラフトのドル箱商品として人気があり、土日・祭日は売り切れの状況です。

○ そば道場

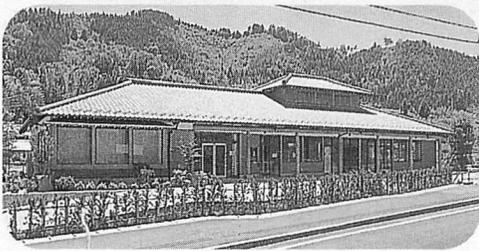
「見る観光から体験しながら楽しむ」の観光ニーズに対応した施設としてそば打ち体験道場があります。四人が一つのテーブルを囲み、そば粉からねり、のぼし、きりの工程で製麺し、厨房にてゆがきとそばのもりつけを体験します。自作のそばを憩いの部屋でテレビを見ながら試食します。指導料込みで一人当り七百円で約二時間楽しめます。

親子三代のふれあいの場として、

◆はじめに

「中山間地帯」の宿命として過疎の波が大きく打ち寄せてきていますが、我が中山町では地域の資源を活かしたまちづくりを目指して活性化対策を次々と講じております。定住化構想から交流人口の増加をプラスした新しい取り組みとしてクラフトの里が誕生いたしました。

◆クラフトの里の内容



ウッドクラフトセンター

地域の若人のデートや集団見合いの場として、職場の仲間作りの場として、乳児から老人までの幅広い利用があり、予約が必要です。

体験場の傍らに、食事処、こねこね亭があります。開設を計画して、そばの本場、福島・富山・熊本で研修を終えた若人のそば打ち士によって実演しながら食事を取るシステムを取っております。そばの生命はひきたての粉、作りたてのそば、そしてゆがきたてのそばです。が、こねこね亭では地元



ソバ道場でのソバづくり

ち込み、それを即食事に供しております。

○ 公衆トイレ

114㎡の公衆トイレは平成三年に完成しました。六千万円弱の予算を投じて「美と衛生」を活かしたことがプラスに作用して、観光バスが立寄っておりますし、自家用車も土日はひしめきあっています。

◆ 交流広場としての機能

前述したように六つのゾーンが機能して、設置目的でありました都市と農村の交流の広場として、また地域社会の活性化の拠点として貢献しております。全国そば文化協会の会報紙やマスコミによって全国から視察と体験に訪れて来ます。特に町が姉妹提供を結んでいます。特に鳥取県の中山町の皆様やオーストラリア、ゴールドコースト市との、地域間・国際交流も盛んです。土日曜を中心とする青果野菜、加工食品と体験場との組合せ、また、国際交流センターを通しての各国の皆様や県外の方の平日の利用などにぎわっております。メンバーも幼児から老人までののが

あります。

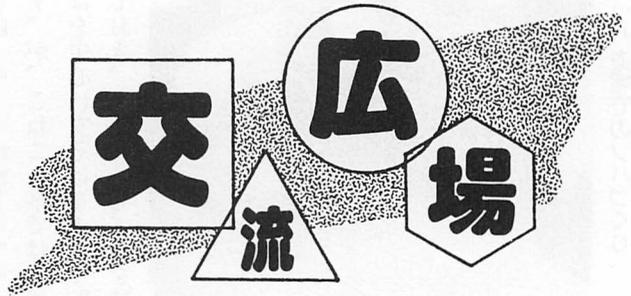
◆ 今後の課題

平成七年五月から町営から第三セクターになり有限会社クラフトの里に経営が移管されました。「企業としてのクラフトの里」と町営としてのクラフトの里」とのギャップや環境の変化による様々な問題がもたらがっています。たとえば、大洲松山間の中心に場所が位置しており、主要道路に面している利便性によってトイレの利用客は非常に多いと思いますが、その人がクラフトの里の営業に比例的に作用しない悩みがあります。もう一つは、県内の高速道路の開通との関わりです。つまり、平成12年度内に伊予市から大洲市までが完成の予定でありまして、開通後の交通量の減少に対してどの様に対応するかという事です。又、人材の点でも町営から企業への意識改革の問題や、土日祭日が開店日として位置づけられ、サービスマンとしての従業員体制整備などが課題です。

◆ おわりに

クラフトの里は松山市から四十分～五十分の距離であり、自然と人情の豊かな山村であります。高速道路開通を意識しながら、ふる里の資源（人と物）を活かして、当地でなければ他にはないといった「ならでは商品」の開発に努力したいと思っています。現在クリの産地として栗を素材とした菓子類や、高冷地を利用したスイカ、さつま芋野菜がありますが、更に一歩進めて付加価値をつけたクリ、梅、野菜の加工食品の開発を行う、クラフトの里に行かねば手に入らないといった商品作りを行い、しかも味よし見ばえよし、安全で割安であることを踏える事が大切です。また、山村の素材を利用した芸術や文化を売物とした手工芸品も考えています。現在に加えてマスマディアをフルに活用して日本から世界に情報を広め、交流の拠点として、クラフトの里を発展させたいと思っています。先輩各位諸機関の御指導をお願いしながら情報ネットワークの基地としても頑張りたいと思っています。

— 真の豊かさを求めて —



我が故郷日吉村は、県都松山市から西南に八十キロ、経済圏の中心である宇和島市から東に三十二キロに位置した高知県境の小さな山村です。人口も昭和三十年の約五千人をピークに、年々若者の流出が進み、現在では二千百人余り、高齢化率も二十九パーセントにも達しており、過疎と高齢化の進んだ村であります。

日吉村はこれまで、これといっ

青空市で生がいつくり

日吉夢産地

大森 千秋

た観光資源も名勝史跡等もなく、村外から村を訪れてもらえる要素は何一つありませんでした。しかし唯一恵まれていたのは、村の中心部に主要国道二線（一九七号・三二〇号）が交差しており、高知



日吉夢産地 全景



県界という辺地にありながら、四国西南内陸部の交通の要衝となっていることです。また、この国道二線は、近年急ピッチで改良が行われており、あと二年余りで二線とも全面二車線に改良の予定となり、完成とともに相当量の交通の増加が見込まれています。

もともと昔から日吉村は、土佐越えの宿場町として栄えてきた村で、高知県との交流も盛んに行われてきました。旧道当時は隣りの高知県梶原町まで峠を越えて車で

一時間半近くかかっていた距離が、新しい国道が開通（昭和五十七年）してからは僅か十五分余りと、大幅に短縮されました。今では昔以上に交流が図られ、青年団や老人クラブ等の各種団体間の交流や、結婚また町村間のスポーツの交流など、人・物・情報の交流が幅広く行われるようになっていきます。また、国道の改良により宇和島、大洲、八幡浜、松山など愛媛県の主要都市と高知県の高知市までは日吉村経由で三時間から四時間以内で結ばれるようになり、観光客やレジャー客などの車の通行もかなり増えています。

このような「地の利」を活かして地域の活性化を図ろうと平成四・五年に国（農林水産省）の三つの補助事業と県の補助事業を受け、事業費約六億一千万円という当村としてはまさに巨費を投じ、特産品センター「日吉夢産地」を建設しました。この「日吉夢産地」という名称は、建設に合わせるため全国公募したもので、これからこの施設を拠点に、いろいろな村の夢を

生み出していくという意味でつけられました。

施設の中には、特産品直売コーナー、農産加工室、レストラン、青空市、きれいなトイレ、また乗用車六十台、大型バス五台が駐車できる広い駐車場(兼イベント広場)等があり、ドライブインの要素を備えた施設となっています。

この施設を建設した目的は、農林業を主体とした地域産業の振興、またそれに伴う農家所得の向上、若者の定住、都市と農村の交流促進等であり、村ではこの日吉夢産地を地域活性化の拠点施設として位置付けています。

その中でも駐車場のわりに設置した青空市は、いつも活気に溢れ、生産者と消費者のふれあいの場として、当施設の「顔」になっています。

オープン当初は、村民から「こんな田舎に巨費を投じて施設を建設しても、どれくらいの人に来てもらえ

るか」といった批判も多く、青空市は僅か三十人程でスタートしました。当初青空市は施設の定休日(火曜日)以外は開市していませんが、平日は四〜五名の会員が出荷するくらいで惨めな状況でした。しかし、新鮮で安いということで、口こみにより次第に客が増え、売上げも日ごとに増えてくるようになりました。現在では会員も二百



青空市で品さだめ中のお客さん

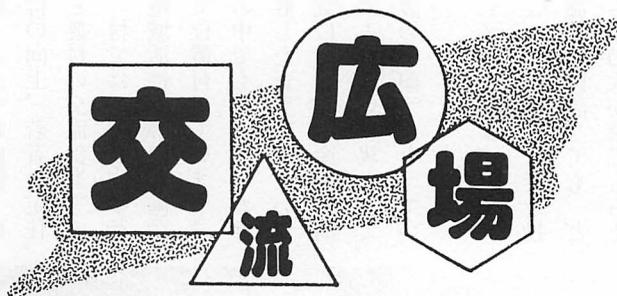
四名にもなっており、日曜日や祝日もなると、野菜、果樹、漬物等の手づくり加工品や山菜などの四季折々の産物が、青空市のスペースいっぱいには所狭しと並んでいます。今では「市」も定着し、休日には宇和島市はもとより、松山市や高知市の方から来られる常連さんもいるほどの盛況ぶりです。

会員の間には高年齢者と婦人の方々ですが、中には月に五万円から多い人で十万円以上売上げとなっています。こういった事がきっかけで『野菜作りが楽しくなった、また市に出品する野菜づくりが生きがいになった』という会員さんが増えてきており、昔のような農業への生産意欲が少しずつ湧いてきているようです。自分が作った野菜や手づくり加工品に自分で価格をつけて消費者に直接買ってもらうという事は、今までの農家には経験のないことです。また、その品物が売れた時の喜びは格別だと目を輝かせて話されます。さらに青空市は出荷者同士のコミュ

ニケーションの場、また生産者と消費者との交流の場にもなっており、色々な情報の収集、提供が行われているようです。

これからますます高齢化していく社会で、行政ができる高齢化社会への対応とは、老人ホーム等の施設の充実もさることながら、高齢者が生きがいを持って、心豊かに生活していく地域の営みを皆んなで考えていくことが大切なことではないでしょうか。そういった取組みの一つが真の豊かな環境を育む足がかりになると思います。最後に、これからも日吉夢産地が、地域の人々に生きがいを与えられる施設として、また地域の活性化の拠点施設として発展していくよう頑張りたいと思っています。

— 真の豊かさを求めて —



DE・あ・い・21って何するところ？

DE・あ・い・21

織田浩史



出店、アマチュアバンドの演奏やインドネシア人留学生によるインドネシアの遊びなど世代間交流と国際交流を兼ね、住民自身が企画運営をした手作りのイベントでした。

また、児童コーナーは幼児・児童向けの絵本・紙芝居のほか、マンガもあり、遊び場所の少なくなつた子どもたちのふれあいの場、集いの場として利用してもらっています。その他喫茶店や直径一・五メートルの地元の海水魚を飼っている水槽が二本あります。水槽の魚はすべて地元の人たちが持ち寄ってくれた魚です。

このエントランスホールでは昨年十二月に村内の四つの若者の団体が連合して、DE・あ・い・21をイルミネーション電球で飾り付け、親子を対象にしたクリスマスイベント「パールイルミネーション」を開催しました。ぼん豆や綿菓子、昔ながらの駄菓子屋などの

「DE・あ・い・21って何するところ？」とよく聞かれても実のところしかし、そう聞かれても実のところ職員にも具体的には説明できません。とにかく地域住民が好き勝手に、我が物顔で、一所懸命利用できる施設を目指しています。簡単に施設の内容を紹介しませんが一階はロビー兼多目的利用スペースの広いエントランスホールがあり、写真展・絵画展・版画展・

でも使える部屋として各種会議のほか、詩吟や俳句、カラオケなど趣味の会が利用したりしています。週五日はピアノ塾が開かれ、多くの子どもたちがピアノを習っています。ほかにはアマチュアバンドの練習場として利用されています。

三階は地元商工会の事務室があるほか、七十人収容の研修室があり、各種会議や講演会、研修会などが催されています。

四階の多目的ホールは小さいながら小回りのきくホールとして各種講演会、会議等のメイン会場として使用されるほか、ピアノ発表会、アマチュアバンドのライブ、



クリスマスコンサート

ビデオ上映会、人形劇、一人芝居、クラシック(弦楽四重奏)コンサート、演劇などの開催に利用されています。

施設前の駐車場では第一・第三日曜日の午前九時から、地元農業者による朝市「DE・あ・い・朝市」が開催され、新鮮な野菜を中心に地元産品の販売を行っていきます。この朝市は毎回百人程度のお客さんが集まり、地域住民の情報交換、交流の場として好評を得ています。

今年の七月には、この駐車場と一階エントランスホールを利用して「DE・あ・い・七夕祭り」と



DE・あ・い・七夕まつり朝市会

題した夜市的なイベントを開催しました。パルイルミネーションを主催した四つの団体のほか、前述の「DE・あ・い・朝市会」、地元の農協や漁協、地元商工業者、南宇和高校などが参加し、アマチュアバンドのコンサートやインドネシア人留学生によるインドネシアの民族舞踊をバックに、出店を中心とした手作りのお祭り騒ぎイベントでした。

このDE・あ・い・七夕祭り」と「パルイルミネーション」は地域住民主体の形で、お金をかけず、各々が持てる力と知恵を出し合って、工夫しながら作りだしたイベントです。目的などはあまり深く考えず、「とにかく楽しけりゃいいや」という若者や高齢者、子どもたちが一体となった交流イベントなのです。地域づくりの主体はあくまでも地域住民でなければならず、いくら行政がテコ入れして村の活性化にとめても、地域住民が「やる気」を起こしてくれなくては意味はありません。そもそもDE・あ・い・21は、

平成四年の広報九月号で、村が取得した国道沿いの用地の活用案を住民から募集し、活用検討委員会による討議を重ね、基本コンセプトを立て、平成五年の広報二月号で名前を募集し「DE・あ・い・21」と名付けられたのです。それは文字通り人と人との出会いの場であり、交流する場を意味しています。DE・あ・い・21は誕生から命名、そして利用・活用まで地域住民の手による住民のための施設なのです。

■地域づくりとネットワーク

地域づくりには他との交流が不可欠です。交流の場を充実させることによってネットワークを構築し、情報の相互交換の中から新たなものを創造していくことが、地域の活性化につながっていくのではないのでしょうか。

DE・あ・い・21の今後の課題として、情報の収集能力と発信能力の不備が挙げられます。DE・あ・い・21のネットワークは徐々に広がりつつありますが、まだまだ小さいものです。DE・あ・い

・21を我が物顔で好き勝手に使ってみようという人たちのネットワークの組織化が急務であると考えています。「口コミ」による情報の相互交換こそが最大・最良の情報伝達方法であると考えています。DE・あ・い・21には職員が三名いますがその他に「給料の支払い非常勤職員」と称する人達が多くいます。彼らは用もないのに事務室に立ち寄り世間話などをして、職員の仕事の邪魔(?)をします。しかし彼らの地域づくりについての助言や発想は、新鮮でDE・あ・い・21の運営に非常に参考になります。また、イベントのときにはどこからともなく現われ、そのイベントを乗っ取ってしまいます。彼らこそが真にDE・あ・い・21の原動力なのです。

地域づくりとは、そこに住む人たちが楽しく生き甲斐を持って生活出来る仕組みを、より多くの仲間と一緒に考え実践していく活動だと思えます。「DE・あ・い・21」はそれが実現できる場を目指しています。

まちづくりNGOの時代に

大津市の空調設備販売修理会社社長の野口陽さんらは、昨年二月に「ストップ・フロン滋賀」の会を発足させた。地球のオゾン層を破壊する原因とされるフロンガスの回収を仲間たちとやり始めたのだ。要請があれば会員の業者が向いてボンベに回収し保管する。それを行政とタイアップして処理していくのだ。その輪はどんどん広がり、本年七月には市民も参加する「フロン回収ネットワーク滋賀」という組織もでき、名古屋市にある同類組織とも業務提携した。その輪は全国、そして世界にも広がろうとしている。

「先日米国に行ったら、『日本から環境NGOが来る』といつて、えらい歓迎されました。これから市民パワーが大事でしょ」と野口さんは語る。

まちづくりの最近の特徴

最近の特徴でいえば、①狭い地域の活動であっても全国や世界とネットワークされつつあること（ストップ・フロン滋賀がまさにその例）、②一部の特別の能力の

「住民ネットが

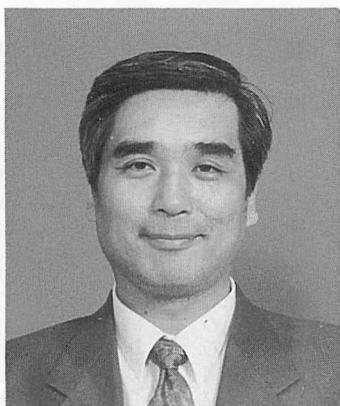
まちを変える」

到来し
たと思
う。

あるリーダーがしきるのではなく、普通の住民がどんな企画してきていること、かつ③従来分けて考えられがちであったまちづくりとボランティアの世界が融合しつつあること（後述のボランティア等）、さらには、④行政に要求してやらせるのではなく、行政とタイアップしながら自分たちがやる、つまり、

滋賀文化短期大学

教授 田直文
教 織



てんぷら油で船が走る？

もう少し現場観察をしていくとさらにそのことが明らかになってくる。滋賀県湖北町の漁師松岡正富さんは、台所から出る廃食用油

を原料にした燃料（バイオ・ディーゼル油）を軽油がわりに琵琶湖を走る漁船に利用し注目を浴びて

いる。河川や琵琶湖の汚染の元になる廃食用油が資源になり、かつ植物性なのでクリーンだという。

愛東町にはついにこの燃料精製の専用プラントが誕生した。コミユニティ毎にボランティアで廃食用油を回収し、それを工場で処理して燃料化する。これでトラクタも動くのだ。

水との関わりでのまちづくりも盛んだ。甲良町では、十三の集落全てが自分たちで公園づくりに取り組んできた。四郎の滝のある公園、女の子が描いたピエロの顔をデザインした公園などユニークな環境ができています。

イベントも育ってきている。米原町醒井地区にはきれいな湧き水が地藏川に流れている。昭和六十二年から毎年京阪神住民を招いて「おいしい水探検隊」という環境を考える体験イベントを続けてい



琵琶湖高島郡域で活動する「アクト21」



甲良町での住民による公園づくり

る。「環境問題といっても難しい理屈ではなく、身近な所で楽しいことをやりながら学ぶことからです。我々はいつでも地球環境問題に取り組んでいるつもりです」と若者たちは言い切る。

まちづくりとボランティア活動の融合

琵琶湖の西の志賀町では、ボランティアグループがいくつも誕生している。その中のひとつ「プラス・ワン」というグループは、商店主や企業経営者、医師らからなり、寿司店主なら一人暮らし老人宅に寿司を提供する、家電店はビ

デオ、カラオケの提供、理髪店は休日を利用し、身体障害者やお年寄りの髪の手入れ、医師は老人の相談相手など、普段着のままのボランティアに取り組んでいる。

草津市にある「オリーブ」というグループは市内在住の外国人のための日本語講座の開講をしている。講師はいずれもこの種のことにはまったくの素人だが、「そのつもりになれば、ちゃんと意思疎通して教えられます」という。

今津町の「アクト21」は、郡域全体から集まった女性有志二十二人のグループで、地域の文化を高めようと自主公演や先般の阪神

・淡路大震災の被害を受けた西宮市の合唱団を招いてのチャリティコンサートなどを開いている。かくして素人のボランティア活動がまちづくりをリードしていく時代になったのだ。

甦る商店街

既存商店街は、どこでも衰退の途にあるといわれるが、滋賀県内ではかなり元気を取り戻してきている。私はかねてよりこれからは商店街そのものが観光・リゾート資源になると唱え続けてきたが、まさにそれが実証されつつある。

平成とともに取り組まれてきた長浜の旧市街地の実験、アーケードを取り払い、かつてのまちなみを甦らせた大通寺前商店街、古い銀行跡をガラス店として生まれ変わらせた成功した黒壁。近江八幡市でも八幡堀周辺の修景美化、まちなみ保存、明治初期に建てられた小学校跡の白雲館の再生オープン。彦根ではお城に隣接する本町地区での新しい商店街「キャッスルロード」の整備など、いずれも今ま

では考えられないほどの人々を集めている。

ひと・まちネットが日本を変える

今や従来の行政的発想では思いつかない活動や、既存団体とはまったく違うグループがおびただしい数で育ってきている。国をあげてボランティア活動やまちづくり活動の支援の仕方、それらのネットワーク化や事業化のためのシステムを整備していくことが課題になってきていると思う。

滋賀県でも「まちづくり団体協議会」や私たちが提唱して六月に発足した「ひと・まちネット滋賀」（会員数百十五名）などが活動を始めている。県下各地の住民活動を支援する組織としての仮称「淡海文化サポートセンター」の開設も県で検討されている。

二十一世紀日本は、こうした住民主導のまちづくりが花開き全国的にネットワーク化される時代だと楽しみにしている。

キラリ光るまち

北海道黒松内町

ブナ北限の里づくり秘話

北海道黒松内町

モヨキリの会事務局長

ペン
ネーム 嶋 明

平成五年十一月十九日、黒松内町まちづくり推進委員会委員長の肩書きをもつ重田実は、時の横路北海道知事から「地域づくり優良事例知事賞」の授与式参列のためサッポロに向かった。

初雪の舞う鉄路を走る早朝の列車の車内はまだ寒く、数人の通学生が白い息をはきながら、「おはようございます」と声をかける。「七年の歳月が過ぎたなあ」と重田は流れ移る車外の景色に思い出を重ねて観ていた。

黒松内町は北海道を魚のカレイに例えると、尾びれの付け根の部分にあたり、道都札幌市とエキゾチックな港町函館市のちょうど中間に位置している。

国道五号線、JR函館本線が通過し、かつては陸路の要所として人口七千人を越えていた時期もあったが現在は酪農・畜産、モチ米、馬鈴薯、ビート等、気候風土にあった作物を軸に、農業を基幹産業とする人口三千八百人の静かな農村である。

昭和六十年の十月、黒松内町に非公式のまちづくり団体「モヨキリの会」が誕生した。

すでに町内には、イベント開催を通して元気醸成役をはたしつつあった「トモウロウ」や飲みニユケーショから、新風土づくりの夢をとという「カムイワッカの会」が先行。ワッカの佐々木は、後に食文化による町興しを成功させる。

達の役目だ」年頭の飲部と年少の青池は酔いがまわるほどに固い握手を交わした。

モヨキリとはアイヌ語で、川が蛇行するという意味。試行錯誤を繰り返しながらやがて大海に至るという青臭い思いが込められていた。

アンテナを張り巡らし、足を使ひ、古老や郷土史家を幾度となく訪ね、町の地理と歴史の勉強を重ねた。開発局の寅さんを招いての西欧農村事情、国内先進地のまちづくり情報等の収集に努め、またたくまに一年が過ぎていた。

溜り場であった「黒ひげ」のストープにもいつしか火が入り、シナリオのキーワードは「環境・健康・教育・交流」の4Kに決まった。

主人公の候補は二十を越えていたが、消去法で、北限のブナの森になった。

「原生林はどんな大金をもったとしても創造



町のシンボル「森のお医者さん クマゲラ」

できない「こだけの宝だよ」

「幾度かの伐採の危機を先人の賢明な知恵で救ってきたんだから後世にもこの話を伝えよう。樫から積ってね」

「半世紀たって、俺たちみたいな馬鹿が出現することを期待してな」

誰からともなく「ブナ北限の里づくり構想」にしようと表題も決まり、副題に「都市との交流をめぐらして」と入れることになった。

難産の末構想は誕生したが、未熟な夢種が育つとは思っていなかったのである。

天然記念物歌オブナ林は市街地から東南四キロメートル、九十二分のブナ純林である。昭和三年に天然記念物に指定。植物や自然科学など学術的な観察を目的とする専門家は別にして、大方の町民はこの森のことは忘れかけていた。

保水機能にすぐれ美しく豊饒な森は西欧ではマザーツリー、高貴な木の代表として評価が高い。

モヨキリの会から構想を示された重田は、まちづくり推進委員会

の提案ということなら、行政に提案できる。だめでもともとだ。一肌脱ごうと決意する。

認知されてから3年間に構想は、委員会のふところの広さと議会の協力で、構想はまたたくまに、認知されることとなった。

行政の各分野で、多少の味付けをされながら、積極的に活用される一方、まちづくりグループも理解を示し、様々なイベントが生まれていった。

全国規模のブナフォーラム、町特産のもち米を原料にした焼酎ブナシづくの誕生、ブナウオッチングツアー、さらには自然の中で特産の牛肉を味わってもらうブナ天国や、町民大学「ブナ里塾」、ブナとマゲラをモチーフにしたシンボルマークの制定など、まちづくりグループのネットワークで培われていた様々な町外応援団の支援によって、ブナの森との新しい関わりが生まれはじめた。

平成一号の首長となった谷川は、自立型のまちづくりを持論とし、若者の支援を受け、構想の実現に

政治生命をかけた。

歌オブナ林から二キロメートルの丘陵地に自然体験学習宿泊施設を整備。

絶対失敗するといわれた特産物手作り加工センターやキャンプ場そしてブナセンター。

いずれの施設も谷川の英断とリーダーシップに触発された職員的情熱と努力、様々な町外の応援団に支援され、多くの出会いが生まれ好評である。

昭和六十三年十月に開催されたブナフォーラムの折、愛媛県野村町のブナ林保護の運動に関わっていた玉田氏、役場の山崎氏等の尽力で、ブナを縁とした姉妹町縁組みが平成五年三月に提携された。気候風土を越えて、固い友情の輪は広がりがつつある。

交流人口が増え、定住者や新しいビジネスも生まれ自然を活かした自立型のまちづくりはすすくと育っているかに見うけられる。

さらなる果実を求めて、成長拡大を願う声も高まりつつある。がしかしである。宝ものであるはずのブナの森の

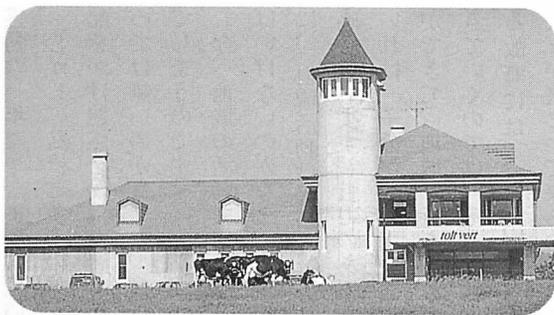
表土や植物に微妙な変化が表れているのだ。

本当にブナの森にとって幸せなことだったのだろうか。

森が教えてくれた大切なことを忘れてはいないか。浮世の雑事に心を奪われたごんべいに、一抹の杞憂が芽生える。

〈追記〉 高らかな笑い声で、人を魅了し続けた男、享年四十五歳、佐々木（ワッカ事務局長）が、十二月二十二日「舞白鳥」の如く、天国に飛翔する。

合掌



特産品加工センター
タワーウェル

あなたが、「自分の故郷が好きですか？」と尋ねられて、どのような返事をしますか。

故郷を好きになるということは、たとえば私がある女性を好きになり、その女性のために何かしてほしい、守ってあげなければいけない。それと同じことではないのでしょうか、故郷のために何かしなければいけない、守らなければいけないと思えることが、故郷を好きになること、愛することではないでしょうかと最近思うのです。

それでは、今どれだけの若者が故郷のことが好きなのかと、見渡してみるとそのような若者は少ないような気がします。たしかに「祭りは好きだぞ」、いう若者は、大勢居るのですが、それでは地域のために何かやってみようかと、自ら進んで立ち上り、仲間に声をかけて故郷を引っ張っていくこと

のできる、その大切さを知っている人間が何人居るのかなと、思うと少し寂しい気がするのです。この様なことを、なぜ思うのかなと考えると、青年団活動を今まで行ってきたからこそ思えるのではないかなと。

私が、地元の青年団に入団して十年以上たつのですが、当時の私は、本当に好き勝手なことをやっ

ていたように思います。

入団して三年ほどした時、私は団長に言葉巧みにだまされ？作文を書き、県の青年大会でなぜか「最優秀」を頂き、全国青年大会に連れていってもらいました。東京で

全国の仲間と知り合った感動や国際青年年で韓国へ行き韓国青年のパワーに圧倒された衝撃。一青年がここまで活動することができたのは、多くの先輩方に支えて頂いたからこそだと思のです。又、宇和島市連合青年団で「アマチュアバンドのコンサート」・「ディスク・パーティー」等、好き勝手なことを行ってきて、その中から

様々な感動を仲間と共に分かち合い、愛媛県青年団連合会では青年大会の前夜祭と銘打って、ビアガーデンや、ディスクを貸切りにしてみたり、復活・愛媛の祭りとして、あるスパーで「郷土芸能や物産展」を開催したり。そして、昨年は愛媛県青年連合会の三十周年大会をOBの方々、また県下の青年たちに迷惑をかけながらも、何とか実施することができ、

感動の一年だったように思います。しかし、私ほど多くの方々心配をかけ迷惑をかけた者もないのでは無いのかな？と、最近考えってしまうのです。

今、地域の活動で何をしなければいけないのかなと、思ったときに、「地域活動は人づくりかなと」感じています。魅力のある親分がいれば、子分がついていき、組織ができて、地域ができ、故郷ができていくのでは、そして魅力のある故郷には、魅力のある多くの人々が集まって来るのではないかな？と、そう思うのです。

私のこれからの課題、それはいかに多くの仲間に感動をわけてあげられるだろう、仲間とどれだけの涙を流すことができるか。その結果として、魅力のある若者を、本当に故郷の好きな・愛することのできる仲間を増やしていき、私たちの故郷をすべての人々と共に、感動と幸せをわかち合えることのできるものにしていくことではないかと、そう思うのです。

私たちの、子らのために…。

今思う事

宇和島市

松本 正義



まちはキャンパス

東予市

目見田雅子

八月のある朝、一人のアメリカ人の青年が、我がまちに、外国語指導助手としてやってきました。

名前は、スコット・ハイムリック。今年の六月に、アメリカの大学を卒業したばかりの二十二歳。彼の両親は、若い頃日本留学の経験があるのですが、初来日である彼は日本語が全くダメで、私と出会ったときには、「おはようございませう」「ありがとう」「またネ！」その程度でした。

しかし、五ヵ月たった今、彼の日本語は、単語から文章へ、見る見るうちに上達してきました。「お疲れ様でした」「今、仕事忙しい？」「風邪ひいてないですか？」など、

彼の覚える日本語は、どれも優しく、思いやりの心があふれるものばかりなのは、いつも感心しています。

いつも笑顔で、好奇心旺盛で、行動力があって……。私より年下なのに、彼に教えられることは、たくさんあります。しかし、日本にきたばかりの彼に、このまちな歩き方、このまちな良さまで教えてもらうとは、思ってもみませんでした。

四月から、広報誌づくりの担当になった私は、一つでも多くの話題を提供しよう、一人でも多くの方に、このまちな良さを知ってもらいたいと、最初は張り切っていました。けれども、まちな端から端までを取材するのは、なかなか

スコット・ハイムリックさん



容易なことではなく、二ヵ月、三ヵ月と経つうちに、だんだんとフットワークが悪くなってきました。

ちょうどその頃、彼に、このまちなについての感想を書いてもらう機会がありました。その中の一文に、私はハッとさせられたのです。——東予市の人口は、約三万五千人で、それは、僕がいた大学の学生数と同じで、とてもおもしろいことです。——

私は、びっくりしてしまいました。私の心に重くのしかかっていた三万五千人のこのまちは、彼にしてみれば、キャンパスの中にあるのと同じだったのかと。私と彼のスケールの違いを見せつけられた感じでした。

確かに彼は、八月以来、あちこち

ちに出かけては、市民として市に溶け込み、このまちなでの生活を楽しんでいます。日本の武道を身につけて帰るのだといって、少林寺拳法を習い始めたり、汗だくになりながら炭焼き体験をしたり、法被姿でだんじりをついでたり、石鎚山にも登ったり、私たちとバスケットをしたり……。まさに、大学生活を楽しむかのように、次々と新しいことにチャレンジしているのです。

まちはキャンパス、市民はみんな友だち。彼は私に、最初に教わった「記事は足で書く」ということを思い出させてくれました。そして今まで私が知らなかったこのまちな良さを、新しい視点で教えてくれたような気がします。

五ヵ月たった今、彼愛用のリュックとマウンテンバイクは、まちなではもうすっかり、おなじみのスタイルになりました。そして彼と同様私も、まちな情報収集に、毎日スニーカーの底をすり減らしています。

リレーで
ちよつ
トーク

西フローラです よろしく!

野村町花卉生産グループ
「西フローラ」 松井 律子



平成元年に、町が提唱する「花
いっぱい運動」を、きっかけに、
むらおこし事業として、二棟のハ
ウスに五人のおばちゃん達（五十
代・六十代）でスタートしました。
初めての試みで、夢と現実のきび
しさを感じながらの出発でした。
三年後、パート的だった仕事を改
善し、一日中働ける場としました。
みんなの決意も新たに、若手二人
を加えて、九棟のハウスに拡張し、
“知恵と力を出し合って頑張ろう”
を合言葉に、名称も、「西フローラ」
と改め、再出発しました。
年中無休（自由に休暇がとれる）
で、年間四十種類の花苗を栽培し
ています。一 種類から数万個の花
苗に育て、出荷出来るまでには、

土づくりから植えつけまで愛の
手がかけるのです。移植時の
井戸端会議は、幅広い年齢によっ
て話題も豊富、ふるきを温めあた
らしきを知る、楽しい場です。

しかし、四季を通じ、すべてが
スムーズに流れるはずはありません。
冷夏長雨、猛暑、台風、自然
には逆らえません。また、真夏の
ハウスはやりきれません。水の確
保は、地元の有志の協力で地下四
十メートルまでボーリングし、十
分に使えるようになりました。灌



フローラのメンバー



水設備も、スイッチひとつでかけ
られるようになり、時間が短縮さ
れ大量生産にもつなりました。
強風で破れたテントも、みんなの
力で張り替えことができ、作業一
つ一つの大変さを身をもって体験
し、また、周囲の人々の温かさを
感じながら歩んでいます。

四月のハウスの中は、可憐な花、
清らかな花、いっぱいいます。ワイ
ワイガヤガヤとみんなで頑張った
お陰です。

花の王様パンジーは、時期をず
らし秋出荷を中心としたため、高
温期の発芽をクリアしなければな
らなくなり、今年の栽培は特にき
びしいものでしたが、咲き始めた
パンジーを見てひと安心、思わず
「よく頑張ったなー。」と、語り

かけるのです。現在、公共事業などに、利用していただいております。美しく咲き乱れ、みんなの心の中にも「花いっぱいになあれー」そう祈っています。

販路として、町内のまごころ市に、毎週土曜日販売します。消費者の方との、コミュニケーションの場として参加しています。中でもお年寄りの方との会話には、安



苗を定植作業中の会員たち

らぎと潤いを感じられます。「食べることより花が好き！この花、きれいに咲いたよ」なんて会話が明日へのエネルギー源になるのです。イベント会場には、ハデなそろいのジャケットを着て、カラフルな花の即売です。最近の花売り娘も板についてきました。又、十五キロ程離れた日吉村の夢産地に花を販売させていただいてから、

他の品も売上げが伸びたようです。花はお客さんを引きつけてくれるのかも知れません。松山の花木センターにも、二時間ほどかけてホロのついた普通トラックにて出荷します。高い値段で取り引き出来るとうれしいのですが、なかなかきびしいのが現状です。良質を目指し、みんなでミーティングを行ない、研究したり話し合ったりします。

近ごろは苗も、しっかりと話していると好評をいただきます。十月末からのサイ

ネリア・プリムラも高く評価してもらっています。

今回、国道沿いに、花の植え付けを依頼されて、四季を通じての花の移り変りを、ドライバーや道行く人に見てもらっています。今後、植栽事業を任せていただける所の開拓など、夢ふくらませています。

今年度から、「野村町から特産品便り」と称した産直事業が取り組まれ、野村の香りをお届け出来る、産直交流が始まりました。私たち西フローラも仲間に入れていただいています。

今後、常設の販売所ができ「あそこに行けば花がある」というようになると、もっと活性化するのではと思います。私たちの口込みだけでは、まだまだ微力なものなのです。きびしい農業情勢の中で、若者が参加出来る経営を夢見ています。私たちおばちゃん達の村おこしに誇りを感じながら・・・

「笑顔から広がる 未来」をモットーに、頑張りたいと思っております。よろしく願います。



— 研究員レポート —

ブラジルに 魅せられて

研究員 竹松 毅

はじめに

今年、日本とブラジルは、修好通商航海条約が締結されて百周年を迎える。その記念事業の一環として開催された。「日本・ブラジル地域リーダー交流事業」に参加させていただいた。

目的は、ブラジル日系人との交流をはじめ各種事業に参加することにより、日伯両国の地域レベルの国際化及び地域の活性化を進め、

※伯国：ブラジル共和国

両国の友好関係の深化に資することであった。

期待と不安のつる中、ブラジルの地に足を踏み入れた。「アミーゴ」、アミーゴ」と甲高い声が飛びかう。手を取り合い、肩を抱き合いながらのブラジル日系人の温かい歓迎、八月十九日のことであつた。

これから、十日間にわたる交流研修が始まる。

忘れられぬ人たち

超高層ビル、ヨーロッパ風の高級住宅が立ち並ぶ、かと思ふと段ボールで造ったポロポロの家、落書だらけの橋桁、そんなコントラストイブな光景を目にしながブラジル経済中枢の街サンパウロ市に着いた。さすがに「人種のるつぼ」といわれるだけのことはあり、様々な肌の色の人たちが賑わっていた。

ブラジル日系人の全体の約七〇%以上はサンパウロ州に、また、約二七%（約三十三万人）が、このサンパウロ市に居住し、商・工

・農業・専門・技術職等、様々な分野で活躍し成功を遂げているという。オフィス街を見渡すと、確かにアジア系の人たちが目立っていた。その中で、ブラジル日系人も、ブラジル国経済発展のために大きく貢献してきたのだろう。

しかし、この業界の最先端で働く日系人三世・四世の活躍の過程において、忘れてはならない人たちがいる。それは、一世・二世の存在である。

かつて、日本からの移民たちは、一儲けして故郷に錦を飾って帰ることが夢であつたが、太平洋戦争敗戦後ブラジルに骨を埋める覚悟を決めた。そして、祖国に帰る日に備え、日本語教育に力を入れてきた一世・二世たちは、その子弟に対し、現地のブラジル教育を授けるようになった。そのため、教育施設の不備な内陸地から、施設の整備されたサンパウロ近郊への移動が著しくなったという。小面積の土地で野菜・麩・養鶏などを取り入れ、家族労働による集約的農業をもって収益をあげ、それ

を教育費にあてた。自分たちの夢を子どもたちに託し、一生懸命働きブラジル教育を授けさせてきた一世・二世たちの存在を決して忘れる事はないという。

その事を象徴するように、あるブラジル愛媛県人会の方にホームステイさせて頂いたとき、言われた言葉が、「今日、私たちが経済的に豊かで、今の仕事に就けたのも、両親をはじめ、まわりの日系人の温かい支援のお陰である。特に、「日系人は信頼できる」という意味でも何度か助けられたことがある」。まさに、日系人の「真面目さ」と日系人同志の「助け合いの精神」がブラジル国での日系社会繁栄につながっていった証といえる。現在、三世・四世たちは、一世・二世の恩義を忘れることなく、日系人どうしのネットワークを大切にしながら日々の生活を送っていた。

果てしなく続く大地

研修中、サンパウロ・ブラジリア・リオデジャネイロ・スザノ・

イグアス等でブラジル日系人の方々と交流し、観光名所を訪問、夜はブラジル愛媛県人会の方々にホームステイさせて頂き親睦を深めていく日々をすごさせていた。

街は景観的にはあまり美しく思えなかったが、活気に溢れているサンパウロ、人工都市であり斬新な近代的建築群や彫像が立ち並ぶ首都ブラジリア、世界三大美港のひとつでもある観光の街リオデジャネイロ、緑豊かなやすらぎの町スザノ、世界一の滝を有すイグアス等、それぞれの街に異なった特徴があったが、何よりも鮮明に記憶に残っているのは、移動時間中、何気なく見ていた、果てしなく続く広大な土地であった。

生きるその土地を農場として所有するブラジルの農家は、ほとんどが経営者である。ホームステイ先の農家は、常に市場に目を向け、経営感覚を養い、マーケティング戦略を勉強しながら、コーヒー・オレンジ・サトウキビ・ばれいしよ・花卉等を栽培している。しか

し、大農地だけにたよる時代はずぎ、農業を企業感覚で取り組まなければ、食っていけない時代になり、又、大量生産だけでなく、付加価値のある物を作らなければ他の同業者たちに太刀打ちできないと話していた。

ブラジルでは、農業経営で成功している日系人が多い。その一人でもある愛媛県人会の方は、「ブラジルって、いいところだろ！ブラジルってすごいだろ！」としきりに声にしていた。その言葉には、大規模農場を一代で築き上げてきた農業経営者としての、自信と誇りがみなぎっていた。ふるさとを離れ、このブラジルの広大な土地を相手に、悪戦苦闘しながらも愛情をそそぎ、その土地と共に歩んできた人生に、そして、夢はまだまだ果てしなく続くという前向きな生き方に、さらに、農業にかける情熱にも感銘をうけた。

それにしても、狭い日本国土において、ブラジルの広大な土地は羨ましい限りであった。

おわりに

今日、ブラジル日系人一世たちは、日本文化に対して、自分達の育ったまちという懐かしさや愛着があるため関心が強い。一方、次世代の日系人たちにとっては、このブラジル国が故郷であり、一世の思いはあまり理解されていないようだ。それでも一世たちは、どうにかして日本文化を次世代の人たちに伝承しようと模索し続け、より一層のブラジル日系社会の繁栄を願っている。

日本の地域社会においても世代交代していくにつれ、ふるさとへの思いや愛着、地域コミュニティの希薄化が生じつつある。そのような中で、先人達の遺産・地域資源の見直しや歴史・伝統文化の伝承等により、人々が真に心の豊かさを感じることができるようなまちづくりを目指している。ブラジル日系人と日本人、お互い生きていく地域は異なるが、共に祖先や両親、先人たちから受け継いできた文化を次世代に伝承し、新たな

創造を目指していくことで、日系社会の発展、地域の活性化を図ろうとしている。

それは、いつの時代にも関係なく、これまでに培われてきた日本独自の文化こそが、日本人の心に温もりや安らぎを与え、幸せな気持ちにさせてくれるからだろう。

今回、ブラジル日系人の方々とのふれあいを通して、日系人の生きざまを見ることができ、同時に日本文化のすばらしさも再認識させられた有意義な交流研修であった。また、日本の反対側にいる日系人の方々、我々の故郷を想い、関心を抱いていてくれることを心強く感じている。

最後になりましたが、この事業に参加するにあたり、ご協力頂きました愛媛県に対して厚くお礼を申し上げますと共に、同行した団員とのネットワークを大切にしながら今後の活動に生かしたいと思っています。

を活かしたまちづくりのきっかけにしたいということで、二十都市から約百八十人が参加し、赤れんがの魅力について熱心に討論された。

そして、シンポジウムの後の懇親会で、「赤煉瓦ネットワーク」と「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」の設立の二つの提案がなされた。そして、この提案がきっかけとなって、赤れんがの建物・施設の保存活動を中心に、地域に根ざした個性的なまちづくりを行なう組織のネットワークづくりのため、平成三年十月に、北海道江別市、横浜市、舞鶴市、呉市などのグループ、個人などの参加で「赤煉瓦ネットワーク」が設立され、現在も、機関誌などの発行や各地の見学会など精力的な活動が続けられている。

また、当初舞鶴市の職員が中心となって行っていた赤れんがによるまちづくり活動を市民と一緒に、中広くやっついこうということで、「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」を平成三年六月に設立し、現在約百九十人の会員で、「赤煉瓦ネットワーク」

の受け皿として、また、情報の交換や赤れんが倉庫群での野外ジャズコンサートなども行っている。

この行政と「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」の関係は、今回の研修のテーマである「住民主体の組織づくりと育成」に向けて、行政が、そのしくみづくりを考えていくうえで、参考になったのではないかと思う。

◎赤れんが博物館

こういった赤れんがにこだわった運動が次のステップとして、世界に類のない「赤れんが博物館」の建設となって形づけられることとなるのである。この博物館は、平成五年十一月、市制施行五十周年の記念事業の一環として、赤れんが倉庫を転活用するかたちで建設された。この倉庫は、旧海軍の魚形水雷庫として明治三十六年に建設されたもので、本格的な鉄骨構造のれんが建築物としては、日本で最古級のものであった。博物館では日本のれんがの歴史のほか、世界四大文明のれんがを中心に、世界各国のれんがやれんが

建造物が、模型などで楽しく紹介されている。そして、れんがに関わる絵画展、前庭でのコンサートなどが実施されたそうで、ちなみに、平成六年度の入館者は、約七万人ということであり、今後の利用者の増加が期待されている。

◎おわりに

交流研修の夜、まいづる建築探偵団の方々と懇談の機会を得ることができたが、その時の話のなかで、これだけ舞鶴で、れんがに

よるまちづくりが浸透してきたのも、「れんがバカ」がいたからだそうである。自分が個性のあるまちづくりのために、必要だと思ったらとことんやってみることが大事であるということであろう。そういうえば、愛媛にも、こだわりの持つて頑張っている人がいるなど思っ、うなずいた。今回、研修に参加された方は比較的若い方が多かったので、ぜひ、地域でのまちづくり活動をされる際には、こだわりの持つて、「夢を形に」していただきたいと思えます。

最後になりましたが、ご多忙にもかかわらず、熱心に対応していただいた、舞鶴市役所馬場課長さんをはじめ、訪問先の各担当の方々に、誌面を借りまして心よりお礼申し上げます。



赤れんが博物館を見学

ふるさとづくりの相互啓発 とキーマンの育成

愛媛県ふるさと整備課 菊池 暁彦

平成七年度 ふるさと
再発見・創造塾

活動報告



新たな「ふるさとづくりのキーマン」として期待される塾生たち

◆はじめに

全国の先駆的なふるさとづくりの成功事例を見ると、どこも地域の資源を活かし、行政と住民、民間等が一体となって取り組んでいます。そして、その中心には「キーマン」となる人物がいるのです。

ふるさとづくりに必要な要素はいくつかありますが、やはり人が大事だと思っています。

愛媛県内の特色ある地域づくりに取り組む団体の数は百を超え、全国でも有数の数を誇っています。こうした中、県ではふるさとづくりに積極的に取り組んでいるリーダーの方々により一層視野を広め、今後のふるさとづくりに役立てていただくため、平成五年度から「ふるさと再発見・創造塾」を開設しています。

今年度も引き続き、県内の市町村から推薦された二十五名の塾生を対象に、県内研修・県外研修・公開講座の研修を実施しました。

まちづくり総合センターと県内七十市町村の共催により実施したこの塾の概要を、私なりの感想を交えながらご紹介します。

◆県内研修

この事業では、県内外の著名な講師を招き、七月二十九日から八月二十一日までの四か月間に、八講座を実施し、ふるさとづくりの

現状や課題、実際にふるさとづくりに取り組んだ体験談等を講義していただきました。

また、塾生同志がお互いに交流を図りながら、特定のテーマについて研究討議するグループ討議も実施しました。塾生の皆さんは、最初からあまり緊張した様子もなく、今までの活動を通してのふるさとづくり論等を積極的に話されていきました。

塾生はそれぞれに、各講義の先生方の提言やふるさとづくり論について考え、今後各地域でそれを参考にふるさとづくり活動に取り組みれることと思います。

◆県外研修

この事業では、ふるさとづくり先進地との交流を通じて、より視野を広めてもらうため、環境保全活動や伝統文化の保存伝承など先駆的で個性的な取り組みが展開されている滋賀県を八月八日～十一日の四日間の日程で訪問しました。住民グループ主体の八幡堀・町並み修景事業に取り組んでいる近

江八幡市、湧水池を復活させ淡水魚ハリヨの飼育によりハリヨの里づくりを進めている五個荘町、三セクによるガラスの館(株)黒壁の経営・芸術版楽市楽座「アート・イン・ナガハマ」の開催に取り組んでいる長浜市、住民の手による景観整備運動と偉人・雨森芳洲を核とした国際交流を積極的に進めている高月町の四市町を訪ね、ふるさとづくりのガイダンス・視察、ふるさとづくりに取り組むグループの方々との交流を実施しました。四市町ともふるさとづくりの内容は違っても「キーマン」となる人がいて、地域の皆さんが一緒になつて、本気で真剣に取り組んでいる姿勢が伺えました。

自らが住みよい、まちづくりの実践には、やはり、文章や言葉だけでは伝わらない事がありますので、実際に交流・視察を実施したことにより、新しい意識が芽生えたことと思います。

◆ふるさと再発見

創造フォーラム'95

ふるさとづくりは、キーとなる人が必要ですが、一人では出来ません。地域の人達の一体的取り組みが必要です。

こうしたことから、地域住民の皆さんの相互啓発と交流促進を図るため、公開講座として「地域の資源を生かした新たなふるさとづくりの展開」をテーマに、十一月二十一日「ふるさと再発見・創造フォーラム'95」を開催しました。

創造塾の総合アドバイザーであり、県内の地域づくりリーダーの指導育成に当たっておられる讃岐幸治先生(愛媛大学教育学部教授)の進行により、広島県作木村過疎

を逆手にとる会会長の安藤周治先生、山形県西川町自然と匠の伝承館主任の井上美恵子先生、地元中島町七志開代表者の山本昭宏先生、以上三名の県内外のふるさとづくり実践活動家の皆さんに地域資源の状況把握と活かし方について提言をいただく「ふるさとづくりリ

レートーク」とフォーラムに参加いただいた皆さんとの意見交換による「ふるさとづくり交流セッション」を実施しました。

◆おわりに

こうして、十一月二十一日のフォーラムをもちまして「ふるさと再発見・創造塾」の研修過程をすべて修了し、昨年・一昨年度に引き続き、新たな「ふるさとづくりのキーマン」が誕生しました。

塾生の皆さんは、それぞれの地域で、この研修を通じて培った知識・ネットワークを活用し、個性ある「ふるさとづくり」を進められることと思います。

私自身この塾を振り返ると、理想と現実という言葉を一歩に思い浮かべます。ふるさとづくりの成功事例や講師の先生の話の中ではふるさとづくりの良い面が際立ちます。しかし、私の体験や塾生の皆さんとの意見交換の中では、ふるさとづくりの現実的課題・難しさというものを考えさせられるのです。しかし同時に、ふるさとづくりに取り組んでおられる方の考え方、ふるさとづくりとは何かを改めて学ぶことが出来ましたので、身近な事から少しずつ、今回の研修を通じて出来たネットワークを大切に、ふるさとづくりに携わっていきたいと思います。

県下各地域で皆さんの自主的・主体的参加のもと、個性的で魅力あるふるさとづくりが展開されるよう願っております。



県内研修 (織田先生を迎えて)

『三人の先達に学ぶ』

父との対話

「遠津国の友を呼び寄せ
本堂で語り尽さん夜の明けするまで」

一九四七年三月、享年四十三才
で逝った父が遺した一首である。

当時二才半ばの末っ子であった私は、頭に白い三角巾を巻き、白装束で、仏間に寝かされていた父の死の姿を最初の記憶として不思議に今も脳裏に残している。しかし、兄や姉達の話によると、まだ人の死ということを知らぬ私は、父の葬儀の準備のために集まってくれる村の人びとや親戚、いとこ達が大量来てくれることをお祭りと思つた、一人はしゃいでいたという。

瀬戸内の小さな島の農家の長男に生まれた父は人一倍進取の気性が強かつたらしく、京都に遊学し、アジアに目を開いていったらしい。島でのミカンづくりに飽き足らず、当時まだ元氣だった祖父母に家業をまかせ、母や長兄姉を連れて台湾（現中華民国）に渡った。そして現地で葉煙草の農園主として一

応の成功を取めたらしい。当時のセピア色のモノクロ写真に現地の協力者と共に写した若き父と母達の満面の笑顔がある。しかし、時は暗い太平洋戦争に突入し、父の夢も挫折した。全てを失って家

えひめ地域づくり研究協議 運営委員

青木 光利

輪の花・宇宙也

今、父の生涯より多く人の世の歲月を重ねているが、父の志ほどに自らを燃焼し尽しているか、この歌を思い起こすたびに自省をせまられるのである。

輪の花・宇宙也

「形に色など末の末、建築家としての高邁な識見と謙虚な



青木 光利

族一同命からがら帰国したという。戦争はますます深みに陥り、失意の父はやがて体調を崩し、戦後まもなく、平和な時代への復興に加わることもかなわず彼岸へ旅立った。冒頭の歌は、その父の無念の思いを吐露したものに違いない。異国の友や協力者達と国境を越えた友情を育くんでいたらしく、父の死後も、毎年台湾からの手紙が途絶えなかった。後年、我が家の墓石を建て替える折、ふるさとの兄はこの一首を墓石に刻み込むことを告げてきた。現世において父との縁の薄かった私は、お蔭でわが生ある限り、墓前で父の想いと対話できるようになった。そして

態度が問われている、と思つてい
ます。私が片時も忘れていないこ
と、山深く、人知れず咲く、名は
なければ清楚な花一輪、立ち去り
がたい、そんな建築が創れたらと
の思い。簡素で自然で静寂で、望
めるものなら、香気と身と心にし
みとおる翳り、凜乎たる気品が漂
うならばと」

建築家・故松村正恒さんの言葉
である。東京から松山にUターン

して十年、新日本建築家協会四国支部の活動に参加させていただく中で松村さんとの出会いを得た。松村さんの素晴らしい建築業績については、すでに大学時代恩師から教えられていた。それだけにそのあまりに大きな存在に半人前の私は、松村さんを敬しながらもなかなか近づけなかった。時は流れ、四十才を過ぎて家協会活動に参加すると、いつもそこに眼光するどく腕組みをした姿があった。しかし、いざ話し始めると慈父のような優しい眼ざしに変わり、軽妙かつウィットに富んだ語り口で慈味のある深い建築論・人間論を話された。以来、松村さんの人柄に魅了された私はそれからというもの足繁く、松村事務所に通い、教えるを請うた。そして師のそばにいる時が私の至福の時となった。それまで敬しつつも遠ざかっていた自らの浅はかさには恥じ入るばかりであった。松村さんは戦後故郷愛媛に帰り、昭和二十年代から三十年代にかけて八幡浜市や大洲市に数多くの詩情に満ちた木造の学校建

築を設計した。愛媛の南予山間から平和憲法の理念に裏打ちされた当時の日本をリードする最新の美しい学舎が生まれていたのである。中央の学者達はその斬新さ一度肝を抜かれた。

一九六〇年、総合誌「文芸春秋」

はその年の日本の建築家十傑の中に地域建築家として唯一人松村正恒を加えたのである。しかし本人はそんな世間の騒ぎなどどこ吹く風と誇ることもなく孤高に生きた。

これ見よがしの自己顕示欲に満ちた建築や人間の態度を嫌い、使う人たちが子供達の視線に合わせた優しさが随所にちりばめられた気品が漂う建築を追求し続けた。

「木で学校をつくるのが芸ではないんでございます。木造の学校に木霊こだまが宿る、そんな学校をつくらないと本当はいけないのではない。建築というものは、建物は、教育にとっては脇役でございます。学校の子供を良くするのも、悪くするのも、それは先生の献身的な愛でございます」

一九九三年二月二十八日、粉雪

の舞う日、松村さんは享年八十一歳の生涯を全うされ、ふたたび自然の命の中に還られた。最後まで燎のように燃えて地域の知の暗闇を照らし続けられた松村精神は今私の胸の中にどかっと居座ったまま動こうとしない。

民力を掘りおこす

「あらゆる現場で、変革が日常的風景となつていく。人びとはこの情勢にとまどいながらも、いまという過渡期における同時代人としての奮闘をみせている。この同時代といったことを、もうすこし柔軟な着想や地道な作業の積み重ねで見据えてみたい。(中略) ジ・アースは愛媛における地力の高まりやイマージネーションを喚起する接地線でありたいと思つています。(後略)」

愛媛の地域文化誌・ジ・アース創刊宣言の一節である。

一九八五年、丁度十年前のこと、私の設計した住宅を某県内誌に掲載することになった。約束の日、記者とカメラマンが現場に現れた。初対面にもかかわらず、カメラマ

ンは記者以上に饒舌に話しかけてきた。カメラマンの名は「忽那修徳」と言い、「松山百点」の編集者でもあるという。それが私達の出遭いであつた。以来、彼は私に何を嗅ぎとつたのか、古くからの知り合いのごとく、わが事務所に不意と現れて、熱っぽい議論をふっかけた。こちらの反応をうかがつた後さつと去る時が続いた。「忽那さんは風のような人ですね。」わが事務所の今井女史がつぶやく。

そうしたある日「実は俺の雑誌を発行したい。ついては何かと応援していただきたい」。出遭いから四年の時を経ていた。その間、彼は自らの地域誌のイメージを醸成させていたのである。

交友を重ねるうちに、彼に対して、愛すべき硬派な「不良中年」の志を嗅ぎとつていた私は、愛媛の地には珍しいこの真摯と無頼を背中合せに持つ男の危なっかしい網渡りの試みに幾何かの力になれるならという気にさせられていた。

一九八九年一月ジ・アースは冒頭の創刊宣言を載せてデビューし

た。それからの彼は、我と我が身をおしまず文字通り一人走り続けた。愛車パジェロの走行メーターは年間五万キロに及んでいた。

取材対象を愛媛という地に限定しながらも、そこに脈打つ鼓動や地霊のささやきと力を伝えんとする彼の情熱は、県内に内在する優れた文化や知的個性を引き出し、ネットワークしながら、着実に地域を越える普遍性を獲得しつづけた。

鋭い日本刃のようなしなやかな感性と人間を見抜いていく眼力を有していた彼にいつしか金属疲労がしのびよつていたのである。創刊以来七年目を迎えた今年、三十九号を刷り上げたその日の未明、私より五才も若く、さらに多くの夢を育くんでいた道途上で、彼は五月の闇の中に消えてしまった。定点観測のように愛媛の地を見据え、そこに内在する多様な光をひろい上げ、地力の豊かさを伝え続けたジ・アースの集積は、これからも地域に生きる私達の足元を照らし続けることであろう。合掌

総合的な福祉
マインドの醸成
「ハーモニープラザ」完成
松山市

このハーモニープラザは二十
一世紀を担う児童の健全育成や情
操を豊かにする場としての児童セ
ンターをはじめ、就業を通じて高
齢者の生きがいと社会参加の促進
を図る拠点としてのシルバー人材
センター、市民の自主的・主体的
な活動の輪を広げるためのボラン
ティアセンターが一体となった複
合施設として、児童・高齢者をは
じめ、多くの市民がふれあい、世
代間交流を図る場としての機能を
持っております。ぜひ一度ご来場
下さい。

● 主な施設

- (1) 中央児童センター



- (2) 遊戯室・工作室・体育室等
シルバー人材センター
木工室・多目的室・作業室等
(3) ボランティアセンター
活動室・印刷室・集会室等

◆ 利用時間
施設によって異なりますの
で使用の際には問い合わせせ
下さい。

◆ 問い合わせ先
社会福祉法人

松山市社会福祉事業団

☎ 089 (933) 5311

都市と山村の交流拠点
「森林館」完成

玉川町

鈍川温泉街から約一キロ上流に
位置するこの施設は、地元特産の
杉材をふんだんに使用し、木材の
特性をいかした磨き丸太を骨組と
したモダンな建築物です。森林館
はあずまや風の休憩所と天井まで
吹き抜けの三角形をした展示室と
に分かれております。休憩所は木
製の長椅子三十基を設置し、約百
名収容出来る広さとなっております。
また、展示室には、この地方
に生息する鳥獣の剥製や、昔山林
で木の伐採や製材に使用した機材
又、森林の生体系に関する図書等
が陳列されています。森林館周辺
は遊歩道を整備し、歩道添には
シャクナゲやサクラ、ツツジ、ツ

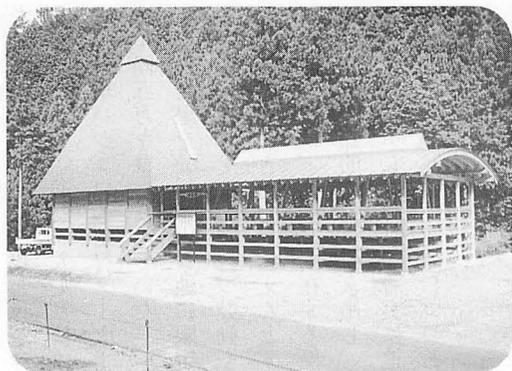
バキ等二万八千
本の花木が植栽
され、四季折々
の山の美しさが
楽しめます。なかでも歩道橋（ふ
れあい橋）は、吊橋で鈍川溪谷と
マッチした風光明媚な所です。玉
川町へお越しの際はぜひ「森林館」
へお立寄り下さい。

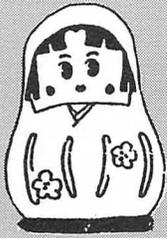
◆ 利用時間 午後八時三十分から
午後五時

◆ 休館日 水曜日

◆ 問合せ先 玉川町生活環境課

☎ 0898 (55) 2211





市には季節感溢れる盛り沢山のとれたての魚や新鮮

松山市から「肱川あらしと開閉橋の町」へと夕やけこやけライン（R378）を西走し、長浜町へ入ると間もなく漁港の前に大きなタコや鯛、果物の絵の壁面が目飛び込んできます。直売所、今坊「しおさい市」です。

この直売所は、農・漁業者が地域の活性化と消費者とのコミュニケーションを通じて「里づくり」をしようと、今年八月にオープンした「海の幸と山の幸」を販売する珍しいものです。

生産者と消費者の コミュニティ広場 今坊「しおさい市」 オープン

長浜町



な蜜柑・白菜などの果物や野菜をはじめ、手作りの乾物、加工食品、蔓で編んだ籠やリースなど色々なものが所狭しと並び、いずれも手ごろな値段で求められます。

今では、生産・地域情報、ふれあいなど、一寸元気を与える農・漁業者の心の駅として、今坊の「里づくり」に役立っています。

ぜひ、お立ち寄り下さい。

◆営業時間 午前九時～午後六時
直売日は、農産物は毎日、魚は毎週日曜日と水曜日の2日です。
但し、魚は海が時化したときはお休みします。

春のアケボノツツジで有名な足摺宇和国立公園「篠山」のふもとにある一本松温泉「あけぼの荘」その「あけぼの荘」を中心とした



町民憩いの場 あけぼの リフレッシュゾーン内に 公園オープン

一本松町

あけぼのリフレッシュゾーン内に今年十月町民待望の公園が完成いたしました。

従来からあったあけぼのグラウンド、プールに加え、ナイター設備完備の砂入り人工芝のテニスコート三面と練習コート一面、様々な遊びの楽しめるコンビネーション遊具、トリム遊具、スリルあふれる全長六十二mのソリスベリ場、五十mのローラースライダー、幼児に人気のバッテリーカー五台、その他鯉がいつぱいの池や桜で囲まれた芝生広場、屋上がステージになっているトイレ・シャワー室の付いたパークステーション等々、子どもから大人までゆったり楽しめる施設がいっぱいあります。

「あけぼの荘」では宿泊もできますので、一本松の名湯につかりながら、御家族でのんびりとした時間を過ごし、心身をリフレッシュしてみたいかがでしょうか。

◆問い合わせ先

一本松町役場企画課

☎ 0895 (84) 2211

お知らせ

「えひめ地域づくり研究会議 '95年度フォーラム」開催 テーマ『地域資源を生かしたまちづくり戦略』

- ◇とき 平成8年1月27日(土)
◇ところ 松山市祝谷「文教会館」
◇主催 えひめ地域づくり研究会議・(財)愛媛県まちづくり総合センター
◇内容 12:00 受付
13:00 開会
【第1部】小鍋談義
13:10 『新えひめ地域づくり活動支援事業』活動報告集会
13:30 『海への手紙事業—第2ステージ—』
「えひめ炭焼きフォーラム」からの報告
【第2部】中鍋談義
13:45 個性ある事例研究
【第3部】大鍋談義
15:10 鼎談(3人によるトーキング)
テーマ『地域資源を生かしたまちづくり戦略』
【第4部】夜鍋談義
17:40 交流会
20:00 閉会
◇参加費 フォーラム 2,000円 交流会 5,000円
◇その他 申込み等、詳しいことは(財)愛媛県まちづくり総合センター内
「えひめ地域づくり研究会議」事務局まで

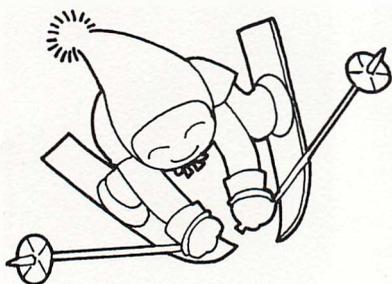
人事消息

「舞たうん」編集係の一員だった篠浦美江さんが十二月二十八日付で、当センターを退職しました。



篠浦美江

お世話になりました。



明けましておめでとうございます。

今年はずミ年ですが、先日テレビで人間とネズミが迷路を抜ける競走をしていました。ネズミは器用に迷路を潜っていきます。ネズミって頭がいいんですね。

今年は何事もスムーズにいく、明るい年だといいですね。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 089(932)7750

FAX 089(932)7760

発行/平成八年一月十日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

(財)愛媛県市町村振興協会